俳句同好会

世話人　星野紫杏

第六十七回　平成八年七月二十六日（金）

初の遠出と納涼を兼ねて、比叡山延暦寺へ吟行といたしました。

兼題　『立葵』『夏安居』『梅雨明け』『蝸牛』『日焼け』と当季雑詠　出題は尚信

吟行　三条京阪駅前集合、浜大津坂本を経て比叡山延暦寺参拝

句座　八瀬遊園地内『わらび茶屋』

兼題句

夏安居と　言釈けしつつ　寄りて飲む　尚信
夏安居　雨も経読む　辻の寺　尚信
立葵　背のびして待つ　無人駅　生雄
藤椅子に　老医くつろぎ　午后休診　生雄
濃き霧に　姫紫陽花は　道しるべ　陵南
梅雨あけの　道に喘ぐや　迷い亀　景流
掃き寄せし葉の蝸牛閉ざしけり　白楊
日焼せる　甲に鼻緒の　八字かな　信子
紫陽花が　首をたれる　石佛　尚信

吟行句

緑陰に　時の流れや　虚子の塔　陵南
山頂は　蜩（ひぐらし）蘿は　油蝉　白楊
遠拝み　して引き返えす　夏木立　紫杏
夏中堂　奥行き深き　昼の闇　紫杏
夏空を　大杉しかと　支えおり　紫杏
せ、らぎと　蝉の音を背に　今の句座　景流
辿りつく　虚子の塔姿に　油照り　景流

第六十八回平成八年九月十日（火）

兼題　『盆の月』『豆飯』『秋雨』『鹿』『夜学』と当季雑詠　出題は陵南

吟行　上賀茂神社

句座　京料理　本店『今昔』

兼題句

鈴虫の　声かすかなり　吾傘寿　治吉
見上げれば　悔いなく老いて　盆の月　生雄
新涼や　稲田を渡る　風の道　治吉
落蝉に仔猫じゃれつき庭の隅　生雄
盆の月　手を振る子等を　送りけり　信子
湯葉と芋　供えて新盆　迎えけり　陵南
はんなりと　塩みもありて　豆の飯　生雄
又一人　遅れて来たる　夜学生　白楊
職場とは　別の顔して　夜学生　陵南
土手道の　大原女濡らす　秋の雨　生雄
家々の　屋根眠らせて　盆の月　白楊

吟行句

萩こぼる　巫女のうなじの　白さかな　一義
今昔とは　誰かつけし名ぞ　秋の句座　一義
仲秋の　天を支えし　大鳥居　一義
『今昔』の　句座に落ちつき　温め酒　一義
烏相撲　斎王代は　笑みもせず　一義
上加茂の　ならの小川や　風は秋　紫杏
詠み終えて　老舗に秋陽　運びけり　一義
法師蝉　鳴く神苑は　人まばら　陵南
岩も木も　憑代（よりしろ）めきて　加茂の秋　白楊
堰（せき）く岩に　苔置く禊（みそぎ）川涼し　白楊
玉砂利を　急ぐ宮人　萩の風　三木
宴跡の　曲水涸れて　秋さびぬ　白楊
吊り絵馬に　込めたる願　秋の風　紫杏
加茂の宮　月立砂の　影を地に　治吉
粧（よそ）おうに　なお一刻の　神の庭　一義
紅白の　萩は七分に　加茂の宮　尚信
斎王代　漱ぐ処や　萩咲ける　白楊

吟行　上賀茂神社にて

第六十九回平成八年十月二十三日（水）

今回はガラリと趣向を変えて吟行は京都タワーの展望台へ参りました。

兼題　『秋』『菊』『柿』『夜長』『鰯』と当季雑詠　出題は紫杏

吟行　京都タワーホテル展望台

句座　新京都ホテル地階京料理『八条』

兼題句

生垣の　裾繕ろへる　水引草　紫杏
小面の　シテに一粒　秋の汗　紫杏
通り雨　菊も桐葉を　傘に借る　尚信
蚊やり香　作努衣尼僧の　腰にゆれ　紫杏
秋うらら　大寺屋根の　片翳り　白楊
鰯雲　掃けるが如き　大公孫樹（おおいちょう）　景流
新佛　好みの熟柿　供えけり　陵南
橋寺や　日々に色変へ　酔芙蓉　陵南
丹波路や　風に波うつ　蕎麦の花　陵南
『字通』まず　序文より読む　夜長かな　白楊
尾花みな　芒（のぎ）に露ある　広野かな　尚信
腰痛に　借りて立たき　菊の杖　生雄
柿をもぐ　小坊主下から　指図され　生雄
枝のま、　無人売場の　富有柿　景流
釣人の　座の定まりて　秋ぬくし　景流

吟行句

枳殻亭　一樹さきがけ　粧へる　白楊
クレーンの　さすその先に　鰯雲　紫杏

第七十回平成八年十一月二十二日（金）

今回は一日に金閣寺と光悦寺を、紅葉をもとめて訪問しました。天候にも恵まれ、今年はや、遅れ気味の紅葉も最高の色着きで、大変沢山の人出でした。

兼題　『冬』『枯野』『毛糸』『焼藷』『鍋』と当季雑詠　出題は陵南

吟行　金閣寺と光悦寺

句座　然林房

兼題句

布団干す　小春日和を　賜はりし　信子
木枯が　内障子まで　音たてて　景流
胎教に　ショパン聴きつ、　毛糸編み　生雄
一輌の　ローカル電車　行く枯野　信子
野佛の　笑顔に見える　冬日和　陵南
丹波路の　宿の目じるし　ぽたん鍋　生雄
此のあたり　枯野の筈や　ニュータウン　生雄
霜冷えの　足につたうや　バスを待つ　紫杏
若者の　歓声ひびく　菊競馬　陵南
冬帽に　代えて明日待つ　ハイキング　紫杏
話すこと　なくて二人の　鍋料理　治吉
満天星（どうだん）の　眞紅に燃えて　秋ぬくし　景流
大根干し　冬を待ちいる　飛騨の里　景流

吟行句

辻風が　集めし落葉　踏み帰る　尚信
青苔（せいたい）に　紅葉塚なす　落葉掻き　白楊
光悦の　茶室は笹と　紅葉かな　陵南
光悦の　垣根をくぐる　紅もみじ　尚信
粧いも　色染め分けて　光悦寺　紫杏
散りてより　苔を粧ふ　紅葉かな　白楊
光悦の　庵（いお）それぞれに　錦着る　尚信
光悦寺　紅葉紅葉の　小路かな　生雄
紅葉陰　うすずみ手洗（ちょうず）と　教へらる　白楊

俳句同好会参加者

大和電設工業（株）　栩谷四郎
（株）デリブ　林　治吉
光星電工（株）　久保白楊
（株）淀電気水道工業所　田中生雄
（株）オリヂナル電設　石崎陵南
（株）トーエネック　新谷景流
日本システム工業（株）　三井喜代治
洛南電気工業（株）　原田　恕
堀電気工事（株）　堀　信子
川鉄電設（株）　下里尚信
（株）トモエ屋　星野紫杏

ゲスト参加

職別国保　三木一義

俳句同好会

世話人　星野紫杏

(社)京都電業協会の俳句同好会も回を重ねて、第七十一回を実施することとなりました。

参加者も発足当時は協会の理事役員が中心でありましたが、現在ではその役職を離れ、OB会になって参りました。世話人としては若い会員または、会員各社の若い従業員の御参加を、切望しています。

第七十一回　平成九年一月二十四日（金）

今年の初例会はお座敷で、炬達に入って読み合わせをすることにして、句座は祇園のお茶屋さんを選びました。

兼題　年末年始に関係ある物事すべてと
当季雑詠

句座　祇園中末吉町「梅田」

兼題句

盆鉢に　梢もありて　木守柿　生雄
箸紙に　お旦那様と　春の茶屋　生雄
我を捨てる　齢ともなりて　懐手　生雄
蛸の稚子　まじるごまめの　目出度さよ　白楊
橙の　据あぐねたる　餅飾　白楊
竈なく　おけら火何の　火種なる　白楊
注連縄の　飾り稲穂に　雀かな　治吉
大根炊き　湯気越しに見る　笑顔かな　陵南
道ばたに　花柊の　こぼれけり　治吉
手作りの　箸紙そろへ　除夜の鐘　信子
山茶花の　散り花手水　神の前　尚信
北山が　大雪らしき　バスの屋根　尚信
寝正月　碁仇ついに　現れず　一義
時を経し　格子家並や　寒の入り　一義
こちらどす　女主の　足袋白し　一義
胃を洗う　七草粥に　掌を合はす　一義
カレンダー　残る一枚　冬景色　紫杏
連子戸の　奥にさし込む　冬場かな　紫杏
湯豆腐も　半丁づつの　二人かな　紫杏
白菜は　軽目の重石で　漬けるべし　紫杏

第七十二回　平成九年二月二十五日（火）

外は寒さ厳しと考えて、今回も吟行はせずに、京料理の老舗「いもぼう」にて開催いたしました。

兼題　『磯かまど』『絵踏』と当季雑詠
「磯かまど」は海女の休憩所で囲を作り火を焚く所です。

句座　祇園円山公園内「いもぼう」　出題　田中生雄
席題　『春しぐれ』『茅』

兼題句

何を話すや　磯かまど　老にけり　紫杏
声ひそめ　覚悟も持たず　老にけり　白楊
絵踏する　白魚啜る　灯影かな　白楊
男女餓鬼　名残り雪あり　余生なお　一義
盆鉢に　供水に丸き　薄氷　信子
父の忌や　山焼の　窓々煙る　奈良の宿　生雄
磨り減りて　盲たまひし　踏絵かな　生雄
下萌や　あまねく恵み　捨鉢も　生雄
春融に　絵を掛け替て　妻を呼ぶ　治吉
骨折の　肩をかばいて　豆撒けり　陵南
磯竈　とは言えぬ程　大焚火　白楊
白椿　だまって切らる　笑顔かな　信子
絵踏して　渡りし如き　吾が世かな　尚信
蝋梅や　寒さに研がれ　透けて咲く　生雄
大雪が　すぎたる朝の　ぬくき風　陵南
絵踏して　御代三代を　生き残り　尚信
女一人　裏参道の　残り雪　生雄
佗助や　京の老舗の　紺絣　一義
畝起し　眠れる蕾の　動かざる　一義
粉雪の　迷い込んだり　通し土間　紫杏
一番湯　絵踏みの心地　足そろり　紫杏

席題句

句座はて、　別れの戸口　春しぐれ　生雄
嵐峡の　薄墨となる　春時雨　白楊
円山を　半ば巡りて　春時雨　紫杏
まだ止まず　いもぼう句座の　春時雨　治吉
亡き母の　育てし庭木　芽ぶきけり　陵南
托僧の　ならび乱れず　春時雨　一義

第七十三回　平成九年三月二十六日（水）

今回も吟行はせず趣向を変えて、ビヤホールでの読み合わせ句会といたしました。

兼題　『オランダが降る』『花ひえ』
『犬ふぐり』『柏落葉』と当季雑詠

句座　ビヤホール「ミュンヘン」　出題　白楊

兼題句

身を捨て、　若葉に託し　柏散る　生雄
踏まれても　咲いて渡来の　犬ふぐり　生雄
煮る程も　摘めぬ土筆を　もてあまし　生雄
種袋　共に植え置く　プランタン　生雄
掻く程も　なく雪消えて　荒れ終ひ　紫杏
堰抜いて　膨れし水に　犬ふぐり　白楊
錠錆びて　傾く祠　柏散る　白楊
象ひきて　オランダ降る　屏風かな　白楊
沓脱の　草履にのりし　花の屑　白楊
花冷えて　花のトンネル　足速に　治吉
花冷えて　花篝火に　手をかざし　治吉

電気の日　野点の釜は　コード付　陵南
犬ふぐり　バス停小屋を　かこみおり　陵南
倉のこる　旧家の跡の　犬ふぐり　信子
床几立て　閉ざせる茶屋に　春近し　紫杏
愚痴聞いて　くれる妻いて　春うらゝ　紫杏
老僧の　素足の下駄に　柏ちる　尚信
犬ふぐり　自転車止める　辻地蔵　信子
犬ふぐり　畝に立てたる　一輪車　紫杏

第七十四回　平成九年五月二日（金）

今回は久しぶりに屋外へ出て、吟行句会と致しました。

兼題　『新茶』『飾太刀』『蟻』と当季雑詠
吟行　「鞍馬寺」
句座　鞍馬の精進料理「雍州路」

兼題句

そりかえる　武者絵の腰の　飾太刀　生雄
新茶あり　小旗に風の　宇治の里　生雄
角振って　一揆めきたる　蟻の列　白楊
ひと包み　ため息ひとつ　新茶かな　尚信
蟻の列　ことわり股ぐ　墓の道　生雄
花疲れ　花の簪　しおれけり　信子
飾太刀　そばで宿題　余念なく　信子
蟻地極　落ちずに年を　重ねけり　生雄
開け放つ　縁より見ゆる　武者飾　白楊

吟行句

五月光　ここまで降りず　天狗杉　一義
落椿　一花とどめり　岩清水　一義
落ち水に　椿沈めて　鞍馬坂　白楊
手庇に　新緑の山　仰ぎけり　紫杏
堂無人　天蓋ゆらす　青葉風　白楊
沸く緑　言葉もなくて　鞍馬寺　尚信
新緑の　底につづらの　鞍馬道　尚信
雲珠桜　鞍馬の山に　風渡る　陵南
遮那王の　今駆けぬけり　若葉風　一義

鞍馬寺にて

第七十五回　平成九年六月二十六日（木）

童心に還って一同何十年ぶりかの初夏の動物園に吟行致しました。

兼題　『梅雨』『氷菓』『杜若』と当季雑詠
吟行　京都市立「動物園」
句座　京料理「今昔」岡崎店

兼題句

背触れて　かわす歩坂や　杜若　白楊
かきつばた　なれど脇役　須磨離宮　尚信
梅雨晴間　浴衣の帯を　締め直し　陵南
老鶯の声　遠くして　暮そこに　紫杏
ポイ捨てを　窘なめられし　氷菓箸　白楊
朝の庫裏　籠に溢る、　茄子胡瓜　信子
杜若　放生池を　擅　景流
夏帽子つなぐ　手と手と　手と手と手　紫杏
ひた降りて　はたと止みけり　走り梅雨　一義
阿修羅のよう　登りつめたり　鉄線花　一義
雨あがり　天井空けて　梅雨の月　尚信
空梅雨を　咎め青柿　落ちつづく　白楊
一山の　鼓動聞いたり　男梅雨　一義
大鳥居　くぐらず反えす　燕かな　紫杏
梅雨明けを　待って掛軸　替えるとす　治吉
日さし来て　妻梅を干す　ぬれ縁に　治吉

吟行句

獣だけ　あわれむなかれ　この暑さ　尚信
キリンずいーと　顔よせ氷菓　ねだりけり　白楊
どの檻も　画学生いて　夏休　白楊
疎水口　都に着きし　渦涼し　白楊
炎天の　ふるさと想ふ　獅子の夢　白楊
夏日陰　水に浮き寝の　つがい鴨　紫杏

俳句同好会参加者

大和電設工業(株)　栩谷　四郎
(株)デリブ　林　治吉
光星電工(株)　久保　白楊
(株)淀電気水道工業所　田中　生雄
(株)オリヂナル電　石崎　陵南
(株)トーエネック　新谷　景流
日本システム工業(株)　三井喜代治
洛南電気工業(株)　原田　恕
堀電気工事(株)　堀　信子
川鉄電設(株)　下里　尚信
(株)トモエ屋　星野　紫杏
ゲスト参加
職別国保　三木　一義

俳句同好会

世話人　星野紫杏

八月には福知山の堀電気工事（株）堀英一さんのお世話で、由良川の鮎漁に参加し遠出の吟行を予定していましたが、残念ながら大雨による増水のため中止となりました。また来夏には宜しくお願い致し度いと存じます。

吟行は初秋の二尊院と晩秋の念仏寺を訪ねました。

第七十六回　平成九年九月二十九日（月）

兼題　八月出題『鮎』『冷やっこ』『夕立』『蝉』『残暑』と当季雑詠

吟行　「野宮神社」から「定寂光寺」「落柿舎」「二尊院」へ

句座　「ころ柿亭」にて

兼題句（八月）

また一病　加へしまゝに　夏終る　紫杏
巫女たちは　大福梅の　土用干し　陵南
雨止みて　またどっと来る　蝉時雨　信子
掌で　切り分けられし　冷奴　景流
ふりかける　鰹うごめき　冷奴　紫杏
草刈機　カチンと石を　蹴りにけり　生雄

兼題句（九月）

欠航の　相次ぐ阜頭　チロロ鳴く　景流
さゞ波の　月を乱せり　かいつぶり　陵南
櫛供養　差し出す指の　白さかな　紫杏
月天心　駅改築の　槌の音　一義
残照の　庭をせばめて　うす紅葉

吟行句

文字摺に　触れて二尊の　細き道　白楊
竹林の　果てなく秋扇　しまひけり　一義
道の辺に　むくげを散らし　嵯峨も奥　白楊
駐在所　萩いけられて　留守居かな　生雄
台杉を　並木としたる　秋の嵯峨　白楊
野宮の　褥の苔や　晩夏光　景流
曼珠沙華　化野までは　なお一里　一義
女一人　いずち訪ねん　嵯峨の秋　一義
元気出せ　二尊の庭の　秋の蝶　陵南
逆光の　木槿残して　嵯峨暮るる　一義

H9・9・29「ころ柿亭」にて

第七十七回　平成九年十一月十二日（水）

兼題　『肌寒』『時雨』『菊』と当季雑詠

吟行　化野「念仏寺」

句座　「泉仙」嵯峨野店

兼題句

出番待つ　丈を揃えて　菊の鉢　生雄
県崖の　菊に飾られ　狛阿吽　白楊
肌寒や　エプロン重ね　立つ厨　信子
肌寒に　急ぎ足なる　吾傘寿　治吉
もみじ葉を　一葉そえし　京料理　陵南
野菊濃し　一会のひとは　紅淡し　一義
温め酒　愛で続けたる　六十年　治吉
菊膾　手はつけず置く　茶懐石　紫杏
菊日和　屋外保育　縦二列　信子

吟行句

紅葉照る　谷を背にして　石仏　白楊
秋探し　刺客も眠る　念仏寺　一義
嵯峨の路や　何も浮かばぬ　秋日和　尚信
嵯峨菊や　菩薩の前に　頭垂れ　尚信
千塔を　抱き化野　木の葉舞う　一義
六面の　地蔵に供へし　嵯峨の菊　陵南
渡月橋　時雨に追はる　橋なかば　生雄
化野の　一石五輪　日の短か　紫杏
寄りそうて　野仏二つ　柿三つ　一義
嵯峨菊の　糸をいたはる　媼かな　白楊
十三塔　影一直線　冬に入る　一義
時雨来て　阿修羅の顰（ひそみ）　陰の濃き　白楊

俳句同好会参加者

大和電設工業(株)　栩谷　四郎
(株)デリブ　林　治吉
光星電工(株)　久保　白楊
(株)淀電気水道工業所　田中　生雄
(株)オリヂナル電設　石崎　陵南
(株)トーエネック　新谷　景流
日本システム工業(株)　三井喜代治
洛南電気工業(株)　原田　恕
堀電気工事(株)　堀　信子
川鉄電設(株)　下里　尚信
(株)トモエ屋　星野　紫杏

ゲスト参加

職別国保　三木　一義